

## ゴミ問題、減量や意識向上で取り組み

近年、ベトナムの経済発展に伴い、ベトナムを訪れる日本人も増えているが、訪越して日本との違いを感じる大きな要素の1つがゴミなのではないかと思われる。分別という考え方はなく、ハノイ、ホーチミンといった中心部の道路ですら、ゴミが散乱、日常的にポイ捨てをする人々。日本人の「常識」からすると驚きの連続である。そんなベトナムのゴミ事情について見ていきたい。

### ベトナムのゴミに関するデータ

ベトナム天然資源環境省の試算によると、2010年には3,000万トン程度だった固形のゴミは、2015年には4,000万トンを超え、2020年には7,000万トン、2025年には9,000万トンとなる見込みである。生活系ゴミ、工業系ゴミ共に2025年には2010年の3倍の量となることが試算されている。

これらは人口増加と急速な経済発展の結果と言えるが、現在のベトナムでは増加するゴミに対して処理能力が追い付いていない。先進国では高熱でゴミを焼却し総量を減らす、といった処理方法が確立されているが、ベトナムにおいては未だそういった手法は普及しておらず、特に生活系ゴミにおいては7割以上が、そのまま埋め立てられているとのデータも存在する。結果として、埋立処分場の不足や有害廃棄物による環境汚染といった問題も発生、特に埋立処分場の不足は深刻で、今後5年以上継続して使用できる埋立処分場は現在稼働している処分場のわずか1割強しか存在しないようだ。

ベトナム政府もこの状況に対して対策を打ち出している。ネックとなっている生活系ゴミの総量を減らすために、各地でゴミの堆肥化事業を推進、現在29か所の堆肥化事業が実施されている。また、所謂3R（リユース、リデュース、リサイクル）の実践に向けた意識付けを目的とした国家戦略も策定中であり、これは現在の廃棄物の総量の60%を再利用、リサイクルによって削減することを目標としている。

### 市民運動の活発化

ポイ捨てといった問題に対処しようとする市民の動きもある。ホーチミン近くのビーチであるブンタウでは、観光客の出したゴミも含めて放置されたゴミが景観を害していたため、これらのゴミを回収し、また、小学生に対してゴミの処理方法などを啓発する団体が立ち上がった。その他にも、文化スポーツ観光省の「青いベトナムの海」キャンペーンに呼応して5,000人の市民が清掃活動に参加するなど、市民の間でもゴミ処理に対する意識は確実に向上している。とはいえ、街中を歩けばポイ捨てされたゴミが目につくのも事実である。経済発展を維持しながらも、その反動ともいえる問題に対して、ベトナムの政府や市民がどのように対処していくのか今後も注目される。